（３）②様式第３号－２（報告書）

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないこと。
※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けること。
※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下とすること。

NITS・教職大学院・教育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	主催：国立大学法人弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻 [教職大学院] 後援：青森県教育委員会
	事業名：【NITS・弘前大学教職大学院コラボ研修】合同研修会 ～子どもにとっても教員にとっても『安全基地』となる学校づくり～
	開催日時：令和８年１月３１日　１３時～１６時 開催場所：弘前大学（青森県弘前市文京町１番地） 参加人数と参加者の属性：281 人（教育関係者、学生　対面 81 人、オンライン 200 人）

目的：

本研修プログラムは、「教室マルトリートメント」の実態を深く理解し、その発生を防ぐための具体的な方策を学ぶことを目的とする。講演者の川上康則先生は、現役教員としての豊富な経験に基づき、教育現場のリアルな課題に寄り添った解決策を提示されている。

本研修会を通じて、参加者が、子どもたちの健やかな成長を支えるための指導法に加えて、自身のウェルビーイングを保つためのヒントを得ることを目指す。さらに、学校が子どもと、教員の双方にとっての「安全基地」となっていくための学校経営のヒントも得られることを目指す場とする。

内容： ※全体発表の内容をテープ起こしするなど、具体的に記載すること。

【第１部：川上康則先生（杉並区立済美養護学校）による講演】

子どもと教員の双方が安心できる「安全基地」としての学校作りの重要性を語られた。まず、指導の名の下で行われる不適切な関わり「教室マルトリートメント」の構造を自覚し、教員自身の「観（サーチライト）」を広げる必要性が指摘された。子どもの行動を単なる問題行動ではなく、困難さへの「適応規制」と捉え直し、背景にある不快感情を代弁する姿勢の重要性が示された。また、教員は自らの経験則や非合理な信念を問い直し、教室に吹かせている「風」や「圧」を自覚すべきであると語られた。子どもはルールよりも信頼関係（ラポール）に従うため、特に自尊感情が低く「助けて」と言えない子どもに対し、安心して弱さを出せる環境を整えることが安全基地の役割であるとされた。同時に、教職が「感情労働」であることを認識し、教員自身のセルフケアを優先すべき点が強調された。心の余白が失われると指導が攻撃的になりやすいため、不適切な関わりの一覧を自身の疲弊に気づく「いたわりのリスト」として活用すべきだと述べられた。大人が自分を大切にし、ゆとりを持つことで初めて、子どもの成長を温かく支えることが可能になる。人は予測通りには育たないという不確実性を教育の豊かさと捉え、向き合い続けることの価値が示された。

【第２部：パネルディスカッション】

教育現場におけるマインドセット変革をテーマに、川上先生と土岐賢悟先生、院生が、現場での経験や、事前に参加者から寄せられた質問等、多岐にわたる視点から議論し、具体的な対策等についての考察を示した。まず、現場に根強い「こうあるべき」という固定観念を解きほぐし、多様性を受容する指導観へ移行する重要性が確認された。院生は大学院での学び直しを通じた経験則の相対化について語り、土岐先生は校長として運動会の服装自由化や順位廃止を断行し、従来の「当たり前」を見直すことで、これまで参加が困難だった児童が全種目に出場できた成果を報告した。川上先生からは、抽象的な教育目標が子どもを追い詰める危険性が指摘され、大人がすべてを管理するのではなく「子どもに委ねる」ことへの転換が提言された。

伝統的な期待との「板挟み」については、宿題廃止をめぐる事例を中心に、学術的根拠に基づき保護者へ説明責任を果たす校長の役割が語られた。川上先生からは、宿題の有無という二項対立を超え、「自分にとっての学びとは何か」という問いに向き合う主体性こそが本質であると示された。研修の在り方についても、知識注入型ではなく、教員が安心して相談できる「ケア」や「ヘルプデスク」としての機能、さらにはゲーム性やカフェ形式を取り入れた柔軟な場作りが提案された。

職員室の心理的安全性については、単なる技術伝達ではない「同僚性」や、校長による５分間の「ミニ研修」が教員の自発的な学びを誘発することが紹介された。また、教職に伴う「業（ごう）」として、過去の不適切な関わりへの後悔を未来の糧とする覚悟や、個人の失敗を組織全体で受け止め、マインドセットを再確認し合う文化の必要性が強調された。最後に、現代の教員は教育の転換点に立つ「インフルエンサー」であり、既成概念をゼロベースで問い直すことが、子どもたちの主体的な成長を支える土台になると結論づけられた。

成果： ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載すること。

本研修会後の参加者アンケートでは２月２日現在で 73 名から回答が得られた。５段階評価の結果、研修全体の満足度は 4.8、自己の指導観や内省は 4.9、実践への活用可能性は 4.9 と、いずれも非常に高い評価であった。これらの結果から、参加者が自身の指導観や「在り方」を深く問い直す、探究的な学びが展開されたことが示唆される。自由記述欄には、自身の指導観や在り方を見つめ直す切実な声が多数寄せられた。ある教員は、「これまで熱心な指導だと思っていた威圧的な関わりが、実は子どもを追い詰めていた可能性に気付き、強い衝撃を受けた。しかし、それを自分を責める材料にするのではなく、自身の疲弊に気付く『いたわりのサイン』として捉え直す視点に救われた」と、自らの内省を語っている。また、別の教員からは、「『安心してわからないと言える教室にしよう』というメッセージに感銘を受けた。明日からは『わかる人？』という発問ではなく、援助要求を促す優しい言葉かけを意識し、子どもと共に正解のない問いに向き合いたい」との実践への決意が示された。さらに、「より良い実践のためには教員の心の『余白』が不可欠であり、組織の一員として、他の職員と共に楽しく余裕を持って働ける基盤づくりから始めたい」という気付きもみられた。川上先生が提言した「教室マルトリートメント」や「サーチライト」という視点に触れ、無意識のうちに子どもを追い詰めていた自身の関わりに気付かされたという記述も多く見受けられた。特に、不適切な指導を単なる「個人の資質」に帰すのではなく、教員が抱えるストレスや「こうあるべき」という呪縛の表れとして捉え直すことで、自分自身を労わることの重要性が再認識されたことが窺える。

パネルディスカッションを通じては、宿題廃止や運動会改革といった具体的な実践例が共有され、管理を手放し子どもに委ねる勇気を持つことの価値が示された。参加者からは、正解のない問いに向き合う「モヤモヤする時間」こそが自身の専門性を高める糧になると前向きな変化が報告された。また、職員室における心理的安全性が、子どもたちが安心して「助けて」と言える環境の基盤になるという共通認識が形成された。今回の「探究型研修」という枠組みにより、教員同士が弱さを認め合い、互いの実践を意味付け直すコミュニティの意義が強調された。最終的に、教員自身が安定した「安全基地」となることが、子どもたちの主体的な育ちを支える確かな一歩になるとの確信が共有された。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

本研修会は、「『共通言語』」④：「探究型研修」として実施され、単なる知識伝達を超えた、教員自身の「在り方」を問い直す機会が提供された。本研修会での議論では、「こうあるべき」という固定観念からの脱却が語られ、経験則を相対化する「学び直し」の意義が示された。これは NITS の提言する、自己との関わりの中で課題の本質に向き合い、価値観を問い直す「探究」のプロセスである。特に第 1 部・第 2 部を通して、チャットを通じて川上先生と参加者、あるいは参加者同士の応答がさかんに行われたことは、参加者の高い研修意欲と、積極的かつ主体的な参画を裏付けるものであったと確認された。

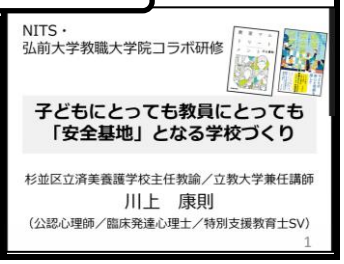
川上先生の講演で示された「安全基地」としての学校作りは、教員が自らの不快感情を直視し、自己をいたわることから始まると語られた。実際の研修での「探究記録」からは、教員がメタ認知を通じて自身の感情や価値観を発見し、そこを起点に実践を発展させる姿が示された。研修担当者が「正解」を教えるのではなく、参加者とともに葛藤する時間を歓迎する姿勢は、教室における信頼関係の構築にも通じる、教員にとっての「安全基地」の役割を果たすとされた。

教員の「在り方」を問い直す探究型研修は、教員自身の心理的安全性を担保し、それが子どもたちの豊かな育ちを支える基盤となることが示された。教員が自分自身を大切にし、豊かな気付きを醸成する余裕を持つことこそが、教育の本質的な豊かさに繋がることが強調された。

アイディアや工夫したこと： ※実際の様子がより分かるよう、必要に応じて写真や図を用いて説明すること。

・対面とオンラインを併用したハイブリッド開催としたことで、冬季における県内外の参加者に対して広く情報を発信することができた。Zoom を用いたことで、特に県外から多くの参加が得られたほか、当日大雪の影響により会場に来ることができない講師や参加者に対しても、柔軟に対応することができた。

・回答のしやすさや事務手続きの効率化を図るため、申込受付やアンケートの収集には Google フォームを活用した。また、メールを用いて資料や事務連絡を事前に配布したことで、参加者の事情に応じた直前の対面・Zoom 参加への変更にも円滑に対応することができた。

土岐賢悟先生

川上康則先生の講義の様子